編集後記

▼新潟県の「登校拒否」問題は、依然として深刻です。九二年度に「学校ぎらいのため」五〇日以上欠席した小・中学校の児童・生徒は、それぞれ四〇〇人、一二三五人で過去最高となりました。全児童、生徒数に対する割合は、小学校は〇・二二％（全国〇・一二）、中学校は一・二％（全国〇・九四）、初めて百人に一人を超えました。その増加率も全国平均を大きく上回っています。

文部省は、登校拒否の児童、生徒約三百人とその家庭、学校を対象に初めて聞き取り調査した結果を、昨年一一月末に公表しました（次号にその資料を掲載予定）。それによると昨年度の全国の登校拒否の小学生は一〇、四四九人、中学生は四七、五二六人です。一〇年前に比べ、対全児童生徒比率で小学校は四倍、中学校は二・二倍に急増しています。

本号では、「登校拒否」問題に取り組んだ県内の両親や教員の実践を紹介し、その課題を考えたいと、特集しました。（吉田）

▼いま、県内の学校では不登校問題が焦眉の課題になっています。大学にせっかく入学しても、入学式だけ出席して不登校となり休学した例もあります。昨年の新潟市教組の教研集会でも不登校の分科会は、教師でいっぱいになりました。まだまだ、不登校についての教師の認識は不十分ですが、悩みは広がっています。

西伸之氏の『アーベルの会』の活動は、不登校問題を通して子どもの発達を考えていく点で、教師にとって示唆にとんでいます。小林文子氏と小川由美子氏はそれぞれ教師と親の立場で不登校問題を語っています。また、県内の地域の変化と不登校を扱った藤田昭氏の論文も併せて読んでもらいたいものです。

▼長崎明氏の「私たちの食糧と環境を守る農業」は検定教科書に農業面でメスを入れています。教師の中でも誰が小・中学校の教科書を採択しているかわからない現状です。子ども・教師・父母に開かれた教科書採択が望まれています。（小林）

▼所員（編集部）になりました。初仕事は、お母さんの声をルポすることでした。〝聞き上手〟になるのはとてもむづかしい。いつも聞かせていた先生スタイルがしみついていて、自信がありませんでした。

▼これを手はじめに、あちこち訪ねて会員のみなさんの思いを語りつたえる〝ルポ屋〟になりたいと編集長に申しでました。声をかけてください。

▼本号の藤田氏の労作を読み、ていねいな分析や調査研究の必要性を痛感しました。

▼学校から出て地域の方々の教育へのねがいに接していく仕事をしていくには、もっと広い視野に立った「学力」をさらに高めていくのが私の大きな課題です。（本田）

にいがたの教育情報 No. 36

1994年1月20日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所
発　行　人　長崎　明
新潟市東中通1－86　山崎ビル2F
〒951 電話（025）228－2924
振替口座・新潟4－12332
印刷所　㈲中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。